

横田 華乃
YOKOTA Kano



永世を夢む
岩絵具、染料、綿布

永世を夢む

町は、不確定性をもち変わり続けている。

不確定性とは確定性を持たず、その時の環境や条件によって変化し続けるものや人、環境の様をさす。

私が幼少の頃から過ごした町は開発や老朽化、自然災害に伴い建物が新たに建てられ、取り壊されるなどして姿を変えた。少し見ないうちに6年間歩き続けた小学校への通学路は全く別の道になり、馴染みの駄菓子屋は消えて新しくマンションが建った。友人の家はなくなり駐車場へと姿を変えた。

このとどまることなく転々と変わりゆく町に寂しさを覚え、私はノスタルジーとセンチメンタルを伴った不確定性を作品にしようと考えた。

そのためこれまでの作品では、パンデミックにより目まぐるしく変わり続ける流動的な情報やルール、人によって態度や印象が変わる誰か、町で起こる偶然性や即興性の様々なゆらぎや断定できないものなどを取り上げてきた。

町の景色をモチーフに不確定性を描く際、私は風景を抽象化し、場所や人、時間を固定しないようにする。それは、主語をなくすことで誰もが自分の故郷だと思えるような表現を目指したかったからだ。

今回の作品《永世を夢む》においても町の一部を重ねたり切り貼りするように描くことで、浮かんで消えていく思い出の残像、折り重なった人の営みを表現することを目指した。そして、フラッシュバックのように思い出される町や開発によって変わっていく町の不確定な様を表現した。

不確定性を表現するとき、私は目に見える風景のみを画面に留めたいのではない。風景を切り取り、その一瞬に流れる空気や、漂うにおい、誰かの気配、張り詰めた寒さ、目に見えない粒子レベルで確かに存在するはずの物質など、それらすべてを描いて閉じ込めたいと考えている。そうすることで観る人はいつでも過ぎ去った一瞬に立ち返ることができるはずだ。